

一物の見方、考え方— 経営に生かす仏教哲学

青木伸雄

1. まえがき

東日本大震災から1年以上の歳月が過ぎ去った。地震と津波災害とそれにとまなう原子力発電所の事故との複合災害でガレキ処理等は、未だに遅々として進んでいない。

それ等の原因は、関係する行政の情報の不確実さに起因する。例えば、除染現場の基準も現地福島住民に対しては年間被曝線量20ミリシーベルトまでOKとし、他の地方からきた人は年間被曝線量1ミリシーベルト以下におさえるという現実、ボランティア活動との整合性を欠き、実態にそぐわない。

又、厚生労働省の暫定規制値の500ベクレル/kgから100ベクレル/kgへの変更は、何が真実なのか情報を受けとる側はわからない摂取基準である。

受けとる国民に対して、信頼できる情報を発信する必要がある。

それは、国際放射線防護委員会(ICRP)等の第三者機関の裏付けのある数値の提示とか、国際原子力機関(IAEA)はどう見ているとか積極的に外部専門機関等の意見を聞き活用することだと思考する。

そこで、情報を提供する場合の倫理観として、「十悪五逆」という仏教の教えを知り、^{ごうまん}傲慢さのない謙虚な心を持って、情報公開をし情報操作をするのではなく第三機関によるチェック等を、実践すべきだと思われる。それは原発事故に限らず失いかけている経済活動における情報開示を「格付」という手法で実践されていることを学びあわせて述べることにする。

企業の不祥事も、相変らずメディアに登場している現実を深く反省する意味でも、傲慢と自己本位の過信と慢心による失敗はさげたいものである。

2. 十悪五逆を知る。

どうも最近の風調をみるにつけ感じることは、釈迦の教え「末法の時代」に深く落ちこんでいく気がしてならない。そこで人間として生きる心を考えてみたい。

末法とは、仏教の世界の歴史観で、釈迦いわゆる仏滅後の最初の千年(一説には五百年ともいう)を正法とし、釈迦の正しい教えが実践され、証果がある正法時代とし、次の千年を像法とし、その教えは存在するが、真実の修行が実践されず、証果を得るものがないとする像法時代とし、その後の一万年を末法とし、正法、像法の時代を経て、教(仏説)のみ残り、行(実践)、証(その結果)の失われた末法の時代に入るとされる、物の見方、考え方である。

それは、東日本大震災以後、自己中心的な思想、風調があらゆる分野でメディアに登場し、「十悪五逆」がくり返される世の中になってしまったことである。

「十悪五逆」とは、「十悪」として殺生、^{せつしょう}偷盗、^{ちゆうとう}邪淫、^{じゃいん}妄語、^{まうご}両舌、^{りやうぜつ}悪口、^{あくくち}綺語、^{きご}貪欲、^{どんよく}瞋恚、^{しんじ}邪見があり、「五逆」として殺母、^{せつぼ}殺父、^{せつふ}殺阿羅漢、^{せつあらかん}悪心出仏血、^{あくしんしゅつぷつ}破和合僧をいう。各々について述べると、

「殺生」は、生きものを殺す、むごい非道をさす。

「偷盗」は、人のものを盗みとること。

「邪淫」は、妻または夫以外の者と姪事を行うこと。

「妄語」は、うそをつくこと。人をだますこと。

「両舌」は、両方の人たちにちがったことをいい、両者を離間し争わせること。

「悪口」は、人をあしざまに言うこと。

「綺語」は、思いもよらない言葉、巧みな言葉。



著者：広島大学生物生産学部非常勤講師

元近畿大学産業理工学部客員教授

日本禅画家協会名誉理事

中国少林書画院名誉教授

法号位 法印 禅画位 奥伝

青木伸雄

釋 禪 禪 (野風生)

雅号 樹泉